



中世鵜沼の栄枯盛衰

〜鵜沼古市場遺跡の調査から〜

令和6年度各務原市埋蔵文化財調査センター企画展



第1章 中世の美濃と鶺沼



図1 鶺沼古市場遺跡の発掘調査位置図

1. 鶺沼古市場遺跡とは

鶺沼古市場遺跡は、鶺沼南町1〜6丁目、古市場町2〜4丁目に所在しています(図1)。縄文時代から近世までの複合遺跡で、室町時代に建てられた承国寺跡も含まれています。

これまでに6度の発掘調査を行っており、そのうち鶺沼古市場遺跡A・C・D・F地区と承国寺遺跡から中世の遺構が見つかっています。遺構には、区画溝や掘立柱建物跡、

鶺沼城城主の屋敷を囲う堀・土塁などがありません。

発掘調査では、多くの遺物が出土しました。その中で、承国寺遺跡から出土した室町時代の瓦が注目されます。承国寺または関連する建物に使われた瓦とみられ、岐阜県内で類例の少ない貴重な資料です。

他には、茶道具の風炉・天目茶碗や、饗宴(客をもてなす宴)に使用された土師器皿、瀬戸・美濃窯産の施陶陶器が見つかりました(写真1)。



写真1 承国寺遺跡、鶺沼古市場遺跡F地区出土遺物

2. 地理的に見た鶺沼古市場遺跡

▼ 低位段丘鶺沼面

鶺沼古市場遺跡の所在する低位段丘鶺沼面は、各務原台地が木曾川に削られて形成されました(図2)。鶺沼面の南側を流れる木曾川は、上流の美濃加茂市から坂祝町にかけて渓谷を流れ、各務原市に入ってから間もなく川幅を一気に広がります。鶺沼面は谷地形と微高地帯に分かれ、東西両端に城山と伊木山の独立丘陵が位置します。鶺沼古市場遺跡は、東側の微高地帯に広がります。

▼ 東山道の渡河地点と交通の要衝

鶺沼は、古代の官道である東山道が北西から南東に斜走して木曾川に至る場所で、渡し船を使用して尾張へ渡っていたと考えられます。渡しについての詳細は分かりませんが、平安時代中期の歌人・藤原仲文の和歌に鶺沼の渡しが詠まれており、少なくともこの頃には存在していたことが分かります。

古代の官道は、中世になってもそのまま主要道路として使われ続けました。鶺沼は、水陸交通の要衝で

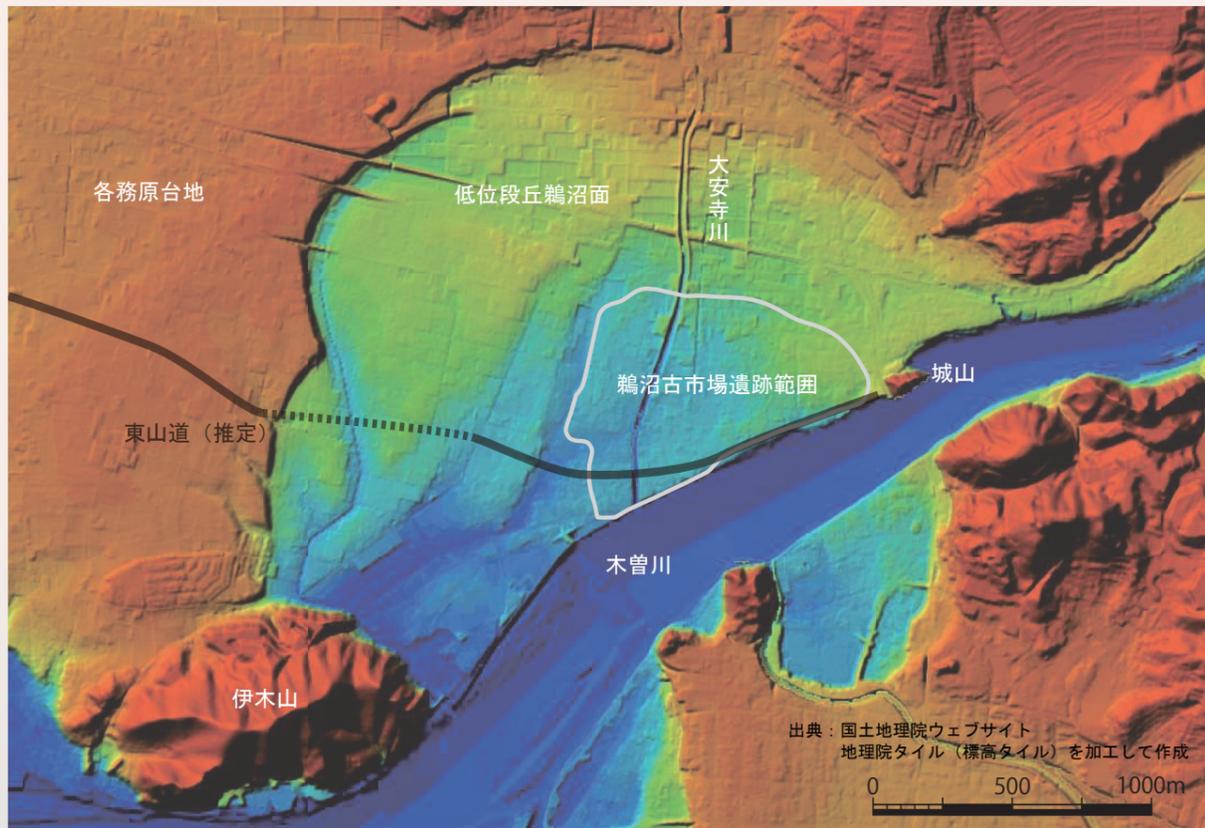


図2 低位段丘鶺沼面地形図

3. 歴史的背景

▼ 鎌倉時代の美濃

中世は、平安時代末期から鎌倉・南北朝・室町・戦国時代に至るまでの時期を指します。朝廷から幕府へと勢力が移り変わり、社会が大きく揺れ動く時代でした。

美濃では、鎌倉時代から戦国時代にかけて木曾川を舞台にたびたび争いが起こりました。承久3年(一二二二)、後鳥羽上皇が鎌倉幕府執権・北条義時打倒を掲げて起こした承久の乱では、木曾川を挟んで上皇側の京方軍と幕府軍が戦いを繰り広げました。このとき、美濃に勢力を広げていた美濃源氏の多くが京方軍として参戦し、乱後に勢力を失いました。一方で、幕府軍についた美濃源氏の土岐氏が、美濃全体に勢力を拡大していきました。

▼美濃国守護土岐氏

土岐氏一族は、平安時代末期以降に美濃国に土着したとみられます。元弘3年(一二三三)の鎌倉幕府滅亡以降、足利尊氏に従い室町幕府の武将として活躍した土岐頼貞は、建武3年(一二三六)に美濃国守護に就任しました(図3)。

以後、約200年間にわたって、土岐氏が美濃国守護を歴任することになりました。室町時代の美濃は、土岐氏とともに歴史を歩んでいきました。

土岐氏の本拠地は土岐郡(多治見市・瑞浪市・土岐市)でしたが、第2代美濃国守護・土岐頼遠が厚見郡(岐阜市)の長森に移しました。そして、第3代頼康が境川(当時の木曾川)に面した交通の要衝である革手に革手城を築き、第11代頼芸に至るまで本拠地としました。

土岐氏は、室町時代を通じて、美濃の軍事・行政権を掌握し、勢力を拡大・維持していきました。しかし、守護代の斎藤氏が守護を上回るほどに勢力を拡大させ、天文21年(一五五二)、頼芸が追放されたことで土岐宗家は没落しました。

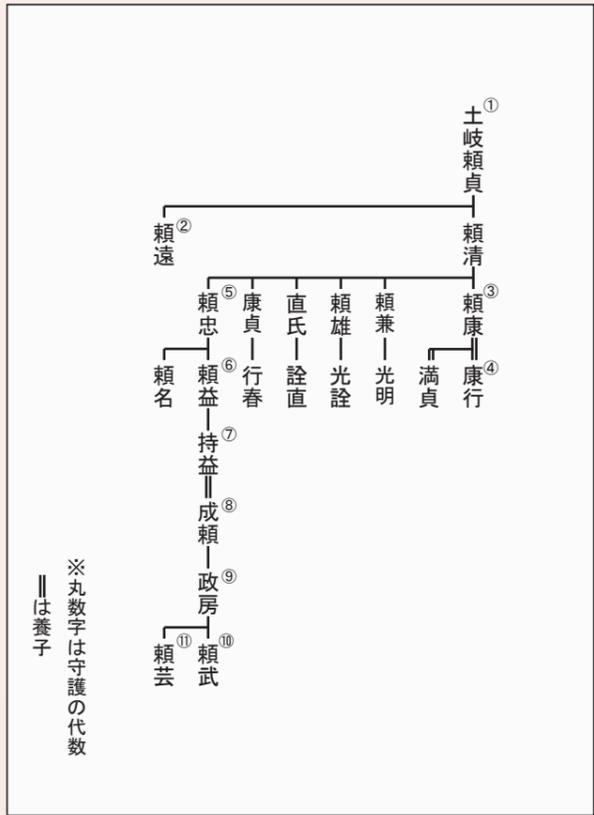


図3 美濃国守護土岐氏略系図

※丸数字は守護の代数
||は養子

4. 鵜沼と土岐氏の関わり

▼武士に信仰された禅宗

禅宗は、鎌倉時代に武士を中心に広まった仏教で、芸術や文化に大きな影響を与えました。

鎌倉幕府は、禅宗の一つである臨済宗を保護し、多くの僧侶を鎌倉に迎えました。鎌倉幕府と結びついた臨済宗は、室町時代にも室町幕府の保護を受けました。臨済宗五山派の寺院は、五山・十刹の制により「五山」「十刹」「諸山」の寺格が定められ、幕府によって統制されています(図4)。京都と鎌倉にそれぞれ五山が定められ、京都五山を中心に五山文化が繁栄しました。

美濃では、初代美濃国守護・土岐頼貞が臨済宗を信仰したことで、美濃国内に広がりました。第3代頼康が、革手城の北側に五山・十刹の制のうち、「諸山」の格式を持つ正法寺を建立するなど、土岐氏の関係する寺院が多く建てられました。鵜沼には、第6代頼益が済北山大安寺、第7代持益が南法山承国寺を建て、鵜沼と土岐氏との関わりが強くなりました。

中世における五山派の寺院は、禅僧による文化活動が盛んに行われただけでなく、地域の政治的・軍事的拠点としても機能していました。そのため、承国寺の建てられた鵜沼も地域の政治的・軍事的拠点としての役割も持っていたと考えられます。

五山・十刹の制
足利義満が寺を管理統制するため南宋にならって導入した臨済宗の寺格制度で、幕府の統制・保護を受ける

寺格
寺院の社会的な地位や宗教的な地位を鑑みて、幕府が認めた寺院の格式のこと

最高位 南禅寺(京都)	
京都五山	鎌倉五山
1 天竜寺	1 建長寺
2 相国寺	2 円覚寺
3 建仁寺	3 寿福寺
4 東福寺	4 浄智寺
5 万寿寺	5 浄妙寺
京都十刹	鎌倉十刹
諸山	

図4 五山・十刹の制

COLUMN

倉庫跡の発見



写真3 鵜沼古市場遺跡A地区 倉庫跡

鵜沼古市場遺跡A地区では、半地下式の建物跡が確認されました。遺構全体の平面規模は、南北3.0~3.2m、東西は2.9m以上に及び、東側には溝状遺構が接続していました。そして、遺構内部は床面・壁面に扁平な川原石が敷き詰められており、石組による緻密な構築が意図されたことが分かります。このように内部全体に石材を貼り詰めた床面は、一般的な竪穴建物では見られません。この遺構はおそらく、ものを収蔵・保管するための倉庫のような施設として、長期にわたり利用されたのではないかと考えられます。



写真4 鵜沼古市場遺跡A地区出土遺物

遺構内からは、山茶碗や皿、天目茶碗といった陶器類のほか、墨を磨るための硯、貨幣など多様な遺物が出土しています。他の建物跡からあまり見られない貴重な器物が出土していることから、重要な施設であったことが窺えます。

COLUMN

中世の鏡



写真2 鵜沼古市場遺跡C地区出土遺物 和鏡

鵜沼古市場遺跡C地区の発掘調査では、和鏡が出土しました。直径9.0cmと銅鏡としては小型で、中央には紐を通す孔があります。内部には、地を這う亀が1匹、翼を広げて舞う鶴が2羽、そして蓬萊山と思われる絵が描かれる構図となっています。このようなデザインを見ると、14世紀前半頃から製作された「蓬萊鏡」ではないかと考えられます。

和鏡は、土坑から木片とともに出土しました。おそらく木箱に収めて丁重に保管されていたものと考えられます。日常的に使用されない特別な器物であったことから、墓に納められたものではないかと考えられます。このことから、土坑は土壌墓であった可能性があげられます。

遺跡からの和鏡の出土は市内では唯一の事例であり、中世の鵜沼を代表する出土遺物です。

第2章 中世鵜沼の最盛期

1. 済北山大安寺

▼大安寺

応永3年(一三九六)、第6代美濃国守護・土岐頼益が、鵜沼北部に笑堂常訴を開山とした大安寺を建立しました。寺域内には、青白院・倚松軒・蔵春軒・大化軒などの塔頭(大きな寺院の敷地内にある独立した小院)が建てられていたといわれています。寺伝によると、永禄年間(一五五八～一五七〇)に大安寺は炎上し、その後、慶長元年(一五九六)、春叔によって再興されました。

▼土岐頼益

土岐頼益は、応永4年(一三九七)、第6代美濃国守護に任命され、有力



写真5 土岐頼益(右)・斎藤利永(左)の宝篋印塔

な武家である斎藤氏などを守護代としながら、国内の地盤を固めていきました。

各地で戦功をあげ、室町幕府の評定衆(政務・訴訟を決定する役職)や侍所頭人(御家人や武士の統率)となり、重用されました。

▼大安寺境内の宝篋印塔

大安寺境内には、県の史跡に指定されている土岐頼益・斎藤利永の墓があり、墓石として宝篋印塔が建てられています(写真5)。土岐頼益の墓とされる宝篋印塔は、昭和の初めに散在していた宝篋印塔の部材を集めたもので頼益のものではありません。一部には承国寺遺跡の藪から運んだ相輪も含まれているようです。



写真6 斎藤氏関係者の宝篋印塔

2. 南法山承国寺

▼承国寺の寺域

第7代持益は、15世紀中葉に、鈍仲全鋭を開山とする臨済宗の承国寺を鵜沼南部に建立しました。承国寺は、五山・十刹の制のうち、「諸山」の格式を持つ寺院です。

寺域は広大で、春沢軒・用梅軒・梅緒軒・漱玉軒・大機軒・衆善軒・対松軒・勤有軒という名の塔頭が建

境内には、斎藤氏関係者の宝篋印塔も残っています(写真6)。



図5 承国寺推定寺域範囲

てられていたといわれています。詳細な範囲は確定していませんが、寺域の西端と北端を示すものとして土塁のみが残されています。南端は東山道までと考えられ、残された小字地名から、約200m四方の寺域と推定されます(図5)。

寺域は西側の一部が大安寺川により分断されています。これは、大安寺川がたびたび氾濫したこと江戸時代に改修工事が行われ、現在の位置に流れるようになったためです。それまでは、大安寺川は鵜沼古市場遺跡の西側を流れていたと考えられます。

▼文学活動の活発化

鵜沼には、承国寺をはじめ複数の寺院が建てられました。禅僧による文学活動が盛んに行われ、五山文学と呼ばれる漢文学が発達しました。五山版という木版による出版も盛んに行われました。

応仁の乱(一四六七～一四七七)の戦火から逃れようと公家や僧侶が地方に散らばり、鵜沼にも避難してきたことで京都に展開した文化や学問なども広まって、鵜沼は文化的拠点として繁栄したと考えられます。

3. 鵜沼に定住した漢詩人

▼京都の漢詩人 万里集九

万里集九(図6)は、室町時代の漢詩人です。正長元年(一四二八)、近江国に生まれ、臨済宗の僧として京都の相国寺で修行しました。応仁元年(一四六七)、京都の戦火を避けて近江へ逃れ、のちに美濃や尾張を転々としてきました。この間に還俗(僧をやめること)したとみられます。

万里集九が鵜沼に居を定めた具体的な時期と場所は不明ですが、文明12年(一四八〇)頃には鵜沼に「梅花無尽蔵」と名付けた庵を構えて定住しました。

▼万里集九の詩文集『梅花無尽蔵』

漢詩文集『梅花無尽蔵』は晩年に自ら編集したものとみられ、京を離れる応仁元年(一四六七)以前の作とみられる詩から、文亀2年(一五〇二)、万里集九75歳(ごろ)の詩まで、全7巻(3巻のみ上下にわかれる)に1451首の詩と111篇の文が収録されています。

『梅花無尽蔵』の特徴は、多くが作詩された年代順に収録されていることです。それぞれの作品には本人による注釈や作詩年月日が多く記されています。このことから国語学・民俗学・歴史学等の研究資料として注目される作品といえます。



図6 万里集九(イメージ図)

▼万里集九の住まいと暮らし

万里集九は、「梅花無尽蔵」と名前を付けた庵に住んでいました。庵には桜の木を植えた庭があり、十数人の来客があってももてなせるほどの広さであったと考えられます。

鵜沼での万里集九の生活は決して楽なものではなかったようで、知り合いの僧らに食料や物資を無心する手紙に付けた詩や、差し入れなどのお礼に贈った詩などが『梅花無尽蔵』に見られます。

一方で万里集九は、各地の寺院や領主から請われて漢詩の講義を行ったり、承国寺春沢軒の梅心に請われて春沢軒で所有する書物に訓点や注を加える仕事をしたりしていました。

土師器皿の大量出土

承国寺遺跡では、中世の遺物が多く出土していますが、その中でも多くを占めるのが土師器皿です。

中世における土師器皿は「かわらけ」とも呼ばれており、饗宴の場で酒杯として使用されたものです。一度使用された土師器皿は、清浄さが失われるとされ、その場限りで廃棄されたと考えられています。

土師器皿と一口に言っても、大きさや形の細部にバリエーションがあり、出土する遺跡によって、作り方の特徴に違いがあります。とくに承国寺遺跡では、大型のものも多く出土しており、京都で見られる土師器皿の影響を強く受けていると考えられます。これらの土師器皿が使用された場面には、この施設に出入りした多くの文学僧や土岐氏の賓客の存在を強く感じさせます。



写真7 土師器皿出土状況



写真8 大量の土師器皿

第3章 承国寺の運営期

1. 承国寺運営年表

年	出来事
文安元(一四四四)	この頃承国寺創建か
康正二(一四五〇)	承国寺に納める大蔵経を求め、使者が朝鮮へ派遣される。開基土岐持益、継嗣争いで斎藤利永に敗れ隠居する。
長祿二(一四五八)	景稜に対して、官寺入寺の許可証である公帖が出される。
寛正二(一四六一)	景稜に代わり瑞麩が住持になる。
寛正五(一四六四)	瑞麩に代わり景壇が住持になる。
応仁元(一四六七)	応仁の乱が起こる(一四六七)
文明六(一四七四)	開基土岐持益死去
文明九(一四七七)	11月 大安寺大化軒の春輝が転任、衆善軒の蒲菴が祝いの詩を贈る。
文明十(一四七八)	元旦、万里集九、住持のもとで寄宿する。
文明十一(一四七九)	方丈で詩会
文明十三(一四八一)	1月7日 詩会 万里集九が初めて参加する。 1月15日 興禪院で詩会 住持は梅心瑞庸である。
文明十四(一四八二)	1月15日 詩会 承国寺の子藤梵頭、美濃守の命を受け、越後の上杉房定に使いとなり赴く。 11月 梅心瑞庸が万里集九の蘇東坡詩集講義が終わった祝いに詩会を開催する。
文明十七(一四八五)	1月15日 詩会 大安寺の春輝の新居に僧たちが招かれる。 万里集九の新居・梅花無尽蔵が完成し、僧たちが招かれる。 周輪に坐公文が出される。
文明十八(一四八六)	周輪の入寺詐欺密告事件が起こる。
延徳元(一四八九)	「深田郷年貢請取状」15世紀中期に、深田郷(美濃加茂市の祇園社領の年貢請負主が承国寺となったため、祇園社との間で書状が交わされる。 承国寺申案(現在の能を催し、僧たちが銅銭を出し合っって演者に与える。10月以後 春沢軒で持定院(斎藤利国)を招いて詩会
延徳二(一四九〇)	1月15日 詩会 9月 僧余人が梅花無尽蔵を訪問する。
延徳三(一四九一)	興雲院(承国寺心で元宵(正月の満月の日を祝う)の詩会 8月 承国寺の僧たちが下呂へ旅行
延徳四(一四九二)	1月15日 詩会 梅心瑞庸が京都臨川寺の公帖を受けたが赴かず。 秋ごろ、惟清が新たに建築に取り掛かる。
明応二(一四九三)	1月15日 詩会
明応三(一四九四)	1月15日 上元の詩会
明応四(一四九五)	船田合戦の影響で、上元の詩会を中止する。住持は遭南溪である。
明応五(一四九六)	1月15日 方丈で詩会 集った歌は100首で、例年より20〜30首少ない。住持は天祐である。
明応七(一四九八)	1月14日 方丈で詩会 住持は鑑湖月である。 春沢軒で梅見の詩会
明応八(一四九九)	1月7日 方丈で詩会 集まった詩は99首 住持は鑑湖月である。 1月23日 春沢軒で梅見の詩会 万里集九が方丈や春沢軒から借りていた書物を返却する。
明応九(一五〇〇)	1月7日 詩会 住持は鑑湖月である。 春沢軒にて花見の詩会
明応十(一五〇一)	1月7日 方丈で詩会
文亀元(一五〇二)	2月 春沢軒で花見の詩会
文亀二(一五〇三)	9月 春沢軒の主(藤峯か)が、万里に「欄柱樹」の詩を作らせる。
文亀三(一五〇四)	正月7日 正月の詩会 107首の詩が集まる。 3月10日 方丈で牡丹の会 30余名が参加する。
永正十(一五一一)	用梅軒の景従が祇園社執行に書状をあてる。
大永二(一五二二)	「深田郷公用未進注文」文亀3年(一五〇三)、永正3年(一五〇六)、永正6年(一五〇九)、永正9年(一五二二)、永正15年(一五二八)、大永元年(一五二二)と大量の未進(租税を納入していないこと)があったと記されている。 承国寺はこの後衰退し廃寺となる。

2. 文献史料からみる承国寺

▼承国寺の大蔵経

承国寺の大蔵経は、承国寺衆善軒の住職・蒲菴がかつて朝鮮へ渡り持ち帰ったものです。

朝鮮王朝の記録書『世祖実録』によると、世祖2年(日本の康正2年(一四五六))3月、足利義政の使者が世祖に謁見し、濃州に新たに承国寺を建てるといふ名目で朝鮮の大蔵経を求めてきたため、朝鮮側は、經典1帙(本の分量の単位)などを使者に贈ったと書かれています。

▼詩会のように

正月に承国寺で開催される詩会は盛大なもので、万里集九はその様子について、京都における詩会にも劣らないほどであると『梅花無尽蔵』に記しています。

▼入寺詐欺密告事件

文明17年(一四八五)冬、美濃国守護代斎藤氏の縁者である周輪という僧に、承国寺の坐公文(その寺には入らないが形式上住持となる辞令)が出されました。

しかし、数か月後、実は周輪は住持となる資格も無しに住持の辞令を得たという話が相国寺鹿苑院蔭涼軒にもたらされました。承国寺の僧たちは疑惑が事実である旨を鹿苑院に訴えますが、しかるべき和尚からの推薦状があり周輪を住持にしたという鹿苑院内からの意見もありました。議論は1年近く続けられたようですが、その結論は不明です。

▼承国寺の蔵書

万里集九は、承国寺から多くの書物を借りていました。『梅花無尽蔵』によると、明応8年(一四九九)ごろ、万里集九は承国寺から借りていた書物を返却しています。この時、春沢軒へ返却したのが十七史(45冊)・史記(56冊)・魚隠前集(50冊)・魚隠後集(40冊)・詩林広記前集(10冊)・詩林広記後集(10冊)の計211冊、方丈へ返却したのが漢書前集・後集(計19冊)でした。

当時承国寺では出版事業も行っていました。文明年間に塔頭の大機軒で虎関師鍊著『聚分韻略』を覆刻刊行しており、文学活動が活発であったことが分かります。

3. 文献史料と出土遺物の年代差

文献史料によると、承国寺が運営された年代は15世紀中頃〜16世紀前期と判断されます。これは、史料の記述に誤りや虚偽のないかぎり正しい年代といえます。一方、考古学では、出土遺物を型式順に並べて編年表を作成し、おおよその実年代を与えます。それに基づけば、承国寺出

土遺物(古瀬戸陶器や山茶碗)の年代は、文献史料上の年代より20年ほど古いものとなります。承国寺で使用されたであろう陶器類は、承国寺創建以前から多く、創建以後に減少するという矛盾を示します。
この矛盾については、いくつかの理由が考えられますが、考古学による出土遺物の年代を補正する必要があるかもしれません。

承国寺遺跡の調査

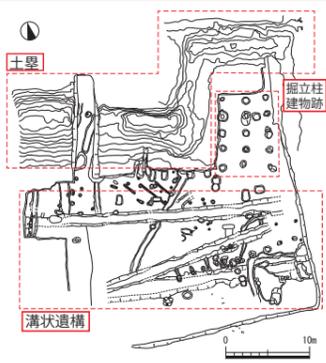


図7 承国寺遺跡 遺構図



写真9 雁振瓦

承国寺遺跡は広域に発掘調査がされており、寺域内に掘られた溝状遺構、掘立柱建物跡、寺院廃絶後に造られたとされる土塁などが確認されています。各遺構から土師器皿をはじめ、陶器類、宝篋印塔、瓦磚など多様な遺物が出土しています。遺物は15世紀半ばから16世紀初め頃のものがあり、その期間を承国寺の創建から廃絶する期間として認めることができます。また、近隣の鶴沼古市場遺跡F地区では、屋根の棟の部分に覆う雁振瓦が出土しており、承国寺遺跡に関連する建物に使われたものと考えられます。

第4章 国境の防御拠点

1. 最前線の防御拠点

▼山頂と平地の拠点

戦国時代は、室町幕府の後継者争いである応仁の乱（一四六七～一四七七）に端を発します。室町幕府の影響力が弱まり、守護の支配下にあった守護代や新興の有力者などが権力を持つようになっていきました。

美濃では、美濃国守護・土岐氏の勢力が衰退し、守護代の斎藤利永・妙椿が勢力を拡大させ実権を握りま

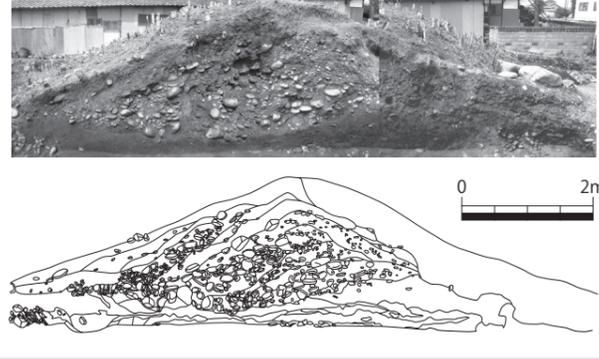


図8 承国寺遺跡 土塁の断面

2. 木曾川沿いの山城

▼鵜沼城

鵜沼城は、標高95mの城山の山頂にあったとされる城です。「宇留間城」「宇留摩城」なども表記され、大沢次郎左衛門の居城として歴史に登場します。江戸時代の地誌である『美濃雑事記』には、城山山頂に城が築かれたと書かれています（図9）。

鵜沼城の跡地には、昭和初期に別荘（城山荘）が建設されたため、城としての構造物は確認できません。山上では発掘調査が行われていないた

した。しかし、守護代を継承した斎藤妙純とその子利親が近江国の合戦で一度に戦死したことで、斎藤氏は弱体化しました。

一方、尾張では、守護代の織田氏が守護斯波氏を追放して勢力を拡大しており、弱体化した斎藤氏にとって織田氏は脅威となりました。そのため、鵜沼は尾張国との国境における最前線の防御拠点となり、承国寺境内に土塁（図8）、城山山頂に鵜沼城が築かれました。

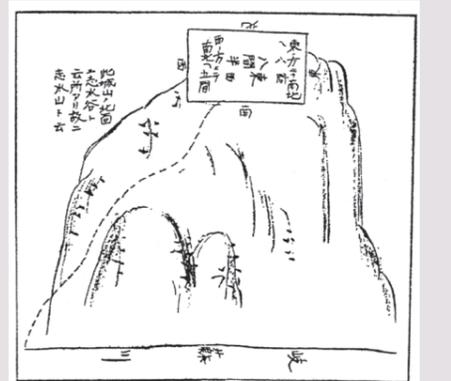


図9 『美濃雑事記』に記された鵜沼城

▼鵜沼城主・大沢次郎左衛門とは

鵜沼城主の大沢次郎左衛門については、その出自や鵜沼城落城以降の動向について明らかになっていません。大沢氏に関する一次史料は存在せず、地誌や戦記、系図によって異なった情報が示されています。

『太閤記』等の後世の資料には、木下藤吉郎秀吉（後の豊臣秀吉）が鵜沼城の大沢氏を調略したことが記されています。秀吉はこの時期から織田信長の家臣として頭角を現し始めるため、「大沢氏の降伏」というエピソードが、秀吉の出世譚に使われたと考えられます。

3. 鵜沼城下の居館跡

▼文献史料の城主居館の位置

『美濃雑事記』には、「山の麓西の方に土居形、堀存在す。今、民家の居屋敷と成る。北の方に諸土屋敷あり、今畑に成る。（略）又北の方畑の中に三狐神森あり、城主居所の旧址の由」と記されており、山の西側に堀と土塁、北には屋敷地、神社には城主の屋敷があったとされています。

▼発掘調査における大沢氏居館跡

鵜沼古市場遺跡C地区の発掘調査では、山の西側の堀と思われる大きな溝が見つかりました。溝は東側から一気に埋められており、東側に土盛りりの構築物の存在が窺えます。この土盛りが土塁と捉えられ、土塁の土で堀を埋めたと考えられます。

堀と土塁は、現在の県道27号線建設に伴う昭和55年の調査でも見つかりました（写真10）。堀は深さ約2m、土塁は高さ約2mの大きさです。鵜沼古市場遺跡C地区の南北方向および東西方向の堀と連続するものであれば、一直線ではなく屈折した形となります（図10）。

4. 国境の防御拠点と木曾川

▼信長の東美濃攻略

桶狭間の戦いで今川義元を打ち破った織田信長は、台頭してきた三河の松平元康（後の徳川家康）と同盟を結んで、東方の安全を確保しました。永禄6年（一五六三）、信長は本拠地を清須から小牧に移し、尾張から美濃への侵攻を目論みました。

折しも永禄7年（一五六四）2月、竹中半兵衛が主君斎藤龍興から稲葉山城を奪い取り、半年間占拠するという事件が起きます。半年後、半兵衛は城を返還し退去しましたが、自力で城を取り返せなかった龍興の美濃国内での影響力は低下していました。

永禄8年（一五六五）7月、信長は美濃の加治田城（富加町）の佐藤氏を寝返らせて味方に付け、美濃攻略への道筋を作っていきます。そして同年8月、龍興方であった織田信清の犬山城を攻略しました。さらに信長は木曾川を越え、東美濃へと侵攻していきます。伊木山に砦を築いて周囲の城に圧力をかけたところ、大沢次郎左衛門の居城であった鵜沼城は降伏し、多治見氏の居城であった猿

啄城（坂祝町）は丹羽長秀の活躍により落城しました。また、金山城（可児市）・堂洞城（富加町）も落城させただことで、信長は東美濃を押さえ、稲葉山城攻略のための足場を固めていきました。

▼木曾川を重視した秀吉

天正12年（一五八四）3月、小牧・長久手の戦いにおいて、羽柴秀吉が鵜沼に布陣しています。秀吉は犬山城を制圧した池田恒興に書状を送り、金山城主の森長可と協力して「犬山渡り」に金山から犬山までの間の船を全て集めるよう命じました。

対する徳川家康は、味方の武将に対し、「秀吉は渡し場の両方（犬山と鵜沼）を固めている、敗北して撤退するつもりは臆病者である」と書状を送っています。すなわち秀吉は、鵜沼と犬山をつなぐ木曾川の渡し場を重要視し、船を集め、防備を手厚くしていたことがわかります。鵜沼には、川湊として木曾川を越えて尾張国に侵攻する秀吉の軍勢の、兵站（補給・輸送・管理）を担う役割があったと思われる。



写真10 昭和55年調査の土塁（右）と堀跡（左）



図10 鵜沼城と堀跡、土塁位置図

第5章 中世鵜沼の栄枯盛衰

中世から近世へ

▼鵜沼の繁栄

鵜沼は、東山道が通り、木曾川に面した地域です。尾張への渡し場もあり、古代から交通の要衝として重要でした。

室町時代では、「諸山」の格式を持つ承国寺が建てられ、美濃国守護・土岐氏との関係が強くなりました。鵜沼は、土岐氏の守護館が置かれた革手城とは木曾川の旧流路で繋がる地域です。そのため、水上交通により往来がしやすい鵜沼は、土岐氏の政治的拠点の一つとなりました。承国寺では、文学活動が盛んに行われていました。五山文学を代表する詩人である万里集九が、応仁の乱の戦火を避けて鵜沼に定住し、承国寺を中心に五山文学が発達していきましました。このように、室町時代の鵜沼は、政治的拠点と文学的拠点となりました。

戦国時代では、土岐氏や斎藤氏の影響が弱くなり、尾張の織田氏が脅威になると、国境の木曾川沿いに鵜沼城、承国寺境内に土塁を築き、永禄8年（一五六五）、織田信長の美濃

侵攻における最前線の防御拠点となりました。

このように、中世の鵜沼は、古代から続く交通の要衝であり、政治的拠点として栄え、国境の防御拠点の役割を持っていました。

▼主要道路と宿場の移転による衰退

近世になると、全国を結ぶ主要五街道のうちの一つである中山道が、慶長7年（一六〇二）に古代の東山道などを原形にして宿駅制が整備され、鵜沼宿が設置されました。

鵜沼宿は、当初、鵜沼古市場遺跡の辺りにあったようですが、寛永期から元禄期にかけて中山道のコースが変更され、それに合わせて鵜沼宿も現在の場所に移転したと考えられます。中山道と宿場が移転したことで、文化的拠点として栄えた頃と比較すると、かつてほどの賑わいは見られなくなりました。このことは、鵜沼古市場遺跡の発掘調査で大量に出土していた中世の出土遺物に対し、近世の出土遺物が少量であることから窺えます。

鵜沼は、平安時代から鵜沼の渡しが存在していました。鵜沼の渡し

は、大正14年（一九二五）に犬山橋が完成するまで、時代によって場所は異なりますが、存続していました。江戸時代、中山道の移転に伴って一時的に交通量は減りましたが、現在も鵜沼は、愛知県へつながる木曾川の渡河地点であり続けています。

**令和6年度
埋蔵文化財調査センター企画展
中世鵜沼の栄枯盛衰
～鵜沼古市場遺跡の調査から～**

会期 令和6年8月3日（土）～9月8日（日）
 会場 各務原市立中央図書館3階 展示室A
 主催 各務原市教育委員会

